

第1回 大阪と福島の高校生が未来を考える 高校生未来サミット

9月23日
～
24日

未来を担う高校生が福島を考える

未来への提言



9月23～24日、大阪と福島の高校生が福島の未来を考え、提言する「第1回高校生未来サミット」が開かれました。大阪からは9名の高校生と大学生1名、福島からは7名の高校生とドイツから大学生1名が参加してくれました。

浜通り農民連では玄米の全袋検査、野菜等の放射性物質検査現場を見学し、流通している農産物の安全性を確認しました。続いて、りょうせん市民共同太陽光発電所では、原発に頼らない分散型エネルギー生産と市民団体が運営している実践を学習。バスの移動中には、大量のフレコンパックに入れられた放射能汚染土を保管する「仮置き場」も見学しました。宿泊した農家民宿では、薪割や生みたて卵の収穫なども体験。最後は梨狩りなど盛りだくさんの2日間を過ごしました。

「サテライト仮想劇

いつか、あの日

東日本大震災と原発事故により、県立高校10校が避難を余儀なくされ、「サテライト校」として位置づけられました。その一つである相馬農業高校飯館校は、プレハブの仮校舎を福島市の福島明成高校の敷地に設置していました。「サテライト仮想劇」——いつか、あの日——は飯館村に帰る日を想定して作られた仮想劇。飯館校の現状を発信するために作られた演劇は、評判を呼び全国大会にも出場しています。この脚本作成と演劇部顧問だった西田直人先生にお話を聞きました。原発事故による避難や帰還は、大いに聞こ入り、福島の子どもたちの抱える気持ちを共有することができました。



参加者の感想

大阪から参加 山本佳奈さん

このサミットに参加して、いろいろ考えることができました。玄米の放射能検査を見て、毎年一袋づつ検査をしている大変さと福島の農産物の現状を知ることができて良かった。宿泊先の方から、福島に来てみてどう思った?と聞かれて、福島の人はみんな笑っていて、被災した雰囲気がないから復興しているんだと思った。でも実際は、山は放射線が高く山菜やきのこが採れず、おばあちゃんは心を痛めていて、元に戻るには時間がかかるという原発事故の深刻さを知った。同じ年代の子供たちで話し合う中で、AとBの意見で対立するのではなく、新しいCという意見を見つける方法を知ることができた。日本の教育や原発などに自分の考えと疑問を持つことができた。こういう機会がまたあればと思いました。

福島から参加 服部杏奈さん

二日間で「どうしたら食料廃棄物を減らせるか」について考え、私たちの班は、「より良いコンビニが必要」という観点から話し合った。気づくととりとめのないことになってしまい、発表も100%まとまった形でできなかつたので少し悔しかった。でもそれは、私たちは答えのない問い合わせに対して、考えていかなければならないのだと気づかされた。考える意欲を失わないようにしたいと思った。意識しないと「とりとめのないことについて考える」ことが面倒になって、やめてしまいそうだから。本当に良い活動に参加させてもらった。ぜひ、来年以降も続いているってほしいなあと思いました。

農民連フラッシュ flash

県民生活中心の県政目指して

10月28日投票の福島県知事選挙が行われ、農民連も構成メンバーの「みんなで新しい県政をつくる会」から候補者を擁立し、各地で小集会やタウンミーティングに取り組みました。東電や国による福島切り捨てが加速する中、東電の農業新賠償について会員に伝えながら農家の切実な要求を候補者に届けました。



トラクターと軽トラ パレードで元気よくアピール

安達地方農民連では10月10日、第5回目になる「軽トラックパレード」を行い、17名が参加しました。「日米FTA、憲法改悪、消費税大増税など暮らしを脅かし暴走政治を続ける安倍政治を止めさせよう。戸別所得補償制度を復活させ、農家を元気にしよう」と怒りの旗をなびかせ、元気なコールで市民にアピールしました。



NOTE 青年部の活動、地元の農や食のことをリレーで紹介／

若い農業者のつぶやき の一と せいねんふ農人

11月は毎週木曜日に浪江町で高原野菜やお餅の販売を行っています。帰宅困難地域の道中は紅葉が美しく、誰も住めないまちとは思えず、悔しさが込み上げてきます。お客様との会話からこの7年の暮らしの一部を肌で知ることができ、あたりまえのことにつづく時間を過ごしました。 by瑞穂

